

から」、いろいろサービスしてくれたけれども、あの八百屋のおばさんもたぶん僕のことを妻に逃げられた哀れなお父さんだと思っていたに違いにないという風にエッセイをまとめて、原稿を渡しました。原稿を渡してから実際に現物の週刊誌ができあがってくるのが2、3週間後です。そんなエッセイを書いたことをこころい忘れて、2年ぶりにその八百屋さんに顔を出しました。たまたま近くを通りかかったんで、八百屋さんに顔を出したんですね。そしたら八百屋さんのおばさんが出てくるなり僕を指差して、「ちょっとあんたあれ私読んだわよ」と週刊文春を読んだというんですね。二言目が「あなた、作家だったのね」、これでまあ、どおりで昼間からぶらぶらしてたわけだ、という疑問が一つ消えました。三言目は、「あんた奥さんいたのね」っていわれました。僕はこの時期だからやっぱり確認しておこうと思って、「おばさんやっぱり僕がエッセイに書いたように、僕のことを妻に逃げられた哀れなお父さんだと思ってた？」って聞いたら、八百屋のおばさんは、「他にどう見えるというのよ、もう私あなたたち親子がかわいそうでかわいそうで」って言ったんですね。やっぱりそうかぁと思って。まあ 20年位前、お父さんが一人で子育てしているときとみんな親切にしてくれるんですよ。とても親切にしてくれるんだけど、もうやらその親切の後ろには哀れみがあったような気がするんですね。

今はこういったシンポジウムも盛んに各地で行われるようになって、いろんな意識が高められた結果、子育てに積極的に関わる若いお父さんの数、非常に増えているような気がします。実際増えています。そして、その若いお父さんたちが飒爽と育児に精を出す結果、何かこの哀れな感じがなくなってきたという気がするんですね。まあこれは非常にいい傾向だと思っています。今後さらに若いお父さんが格好よくですね、それから爽やかに、育児というものに関わってくれたら、また後の世代に、自分たちも結婚して子どもが生まれたら育児に積極的に参加しようと思う男たちの数がどんどん増えていくんじゃないかなと期待しています。

子育てしてるときは、大体家に帰るのは夕方6時くらいですね。そうすると、洗濯、それから夕飯の支度、さらに子どもたちのお風呂いれというものを同時にやっていきます。もう、僕はやるのがものすごく早いです。というのも、僕の母親はずっと退職するまで、電電公社を勤めぬきました。僕は子どもの頃から、そんな母親の家事育児を見ていました。うちの母親は、朝と夜しか家事育児やるのができなかった。昼間は働いています。そうすると短い時間の中で家事育児のやり方はとても早かった。とても早かったけれども、ものすごく雑でした。うちの母親の家事育児を一言で言ったら、味噌もくそも一緒に感じてです。そういううちの母親の家事育児を見てたもんですから、僕もやるのがものすごく早かったんです。

で、洗濯物にしても、僕は見よう見まねで、といっても洗濯機が勝手に洗ってくれるわけなんですけれどもやりました。とにかくいやだったのは、布オムツの洗濯ですね。保育園から汚れているすべての布オムツを持ち帰ってきました。それを、いきなり洗濯機の中に入れるわけにはいかないから、一枚一枚手洗いして、入れてく。必ずウンチがついているのが出てきます。これをトイレに流して、自分で手である程度洗ってから洗濯機の中に入れていく。その頃、ウンチなんてものは、汚いっていう感覚がありませんでした。もう平気で手づかみでした。もうウンチでお手玉平気でできました。

ある日こんなことがありました。赤ちゃんをお風呂に入れようと思って、服を脱がして、オムツだけ当てたまま、僕も裸でここにぱっと抱えて絨毯の上を歩いて、そしてバスルームに入る手前で紙オムツを取りました。取った瞬間目の前から固形物が膨らんできたんですね。ひゅっと膨らんできたなと思ったら、これまたふーっと落ちてきた。まあ、ああいうときていうのは結構ね、人を小ばかにしたような音を立てて落ちていきます。ひゅーっと音を立てて落ちていく。下は絨毯です。こんなものが着地したらどうなるの。掃除しなくちゃいけないのは僕です。これはまた面倒くさいことになるぞと思うと、もう火事場の馬鹿力が働きます。赤

ん坊をここんところすっと置いたまま、絶対に落ちていくウンコから視線をはずさないようにしながら、このままの格好ですっと体をひねって、右手を差し入れてですね、見事絨毯に着地する寸前にこれをキャッチしました。もう思わずガッツポーズが出ました。これをトイレに捨てて、やれやれと。

またあるときは、赤ん坊を浴槽に入れて、きれいに洗って出ようかっていったときに、お湯の底のほうから「ぶぽっ」とですね、こもったような音が聞こえてきたと思うと、固形物がぶかんと浮いてきました。これはやばいと思って、すぐにすくい上げてですね、その頃住んでい35平米の1DKはユニットバスです。浴槽から手を伸ばすとそこにトイレがあった。そこにぼんとして、ちゃっと流して、手を洗っておしまい。赤ちゃんにはこれを母さんには内緒だよなんていながら風呂を出て、妻に向かって、「お前今ちょうどいい湯加減だから早く入っておいで」っていうと妻が「はいー」って入るわけですね。うちの妻は、ものすごく丁寧に家事育児をやる専業主婦の母親に育てられたから、やるのがものすごく丁寧だったんです。うちの妻が、ちょっと固形物が浮かんたようなお風呂に入れるかと思ったら入れません。絶対にお湯をこぼして、浴槽を洗って、またお湯を張って入るということになっちゃう。しかし、見なければ平気なんです。僕と妻との子育てというのは、見ないものは見ないようなやり方をやってます。

僕は洗濯の係だったんで、ウンコなんてものには本当に慣れきっていたんだけど、1ヶ月に1回くらいはなんかヤになっちゃうんです。ストレスがたまってきちゃうんですね、布オムツを手で洗ったりすると。でまあ、あるときいいやと思って、保育園から持ち帰った布オムツそのまま洗濯機の中に入れてちゃった。ひゅっとしたら一枚も汚れてないかもしれない。他にも何か洗えるものあるかと思ったら、洗濯籠の中に妻の真っ白いブラウスが入っているから、これも一緒に洗っちゃったことがあります。で、ガラガラ回り始めて、そうすると段々と水が黄ばんできた。これははずれだった。まあ、入っていたかというような感じで、まあいいやって思って干してみるとですね、妻の真っ白だったブラウスが、ベージュ色っぽくなってんんですね。そのように僕は家事育児をやったといっても褒められたものじゃないですね。手抜きだらけの家事育児をやっていました。その代わり妻にはこう言っていました。「僕が夜洗濯をしているところを君は絶対に見てはいけないよ、見るとよくないことが起こるからね」。みなさん、夕鵜という話ご存知ですか？私が夜はたを織っているところは見てはいけません、見られたら私は旅立たなければならなくなります。まああれと同じなんです。ところが、1ヶ月に1回くらい超雑な、真っ白いブラウスがベージュっぽくなるような洗濯をやっちゃうんです。たまたまそんな洗濯をしているときに、後ろに人の気配がしたんで、ふっと振り向いたら妻が立っていました。そして妻は、「あなた、こんな雑な洗濯をしていたの、もう私耐えられない」というわけで、妻はもうあなたには任せられないと言って、洗濯は私がやると言い張って、3日やりました。昼間学校の先生として働きながら夜帰ってきて、僕なんかの手抜きの家事ではまったくない、もう非常に丁寧な洗濯を、布オムツがいっぱいある状態で1日3回くらい洗濯するわけですよ。で、もうへとへとになってしまった。3日目にやっぱり根を上げました。

そこで僕は、「ほらね、やっぱり無理だから、昼間働いて夜またこんなことやってら疲れるからやめなさい、僕に任せなさい」と。そして、さらにこう言いました。「僕たち結婚して一緒に暮らし、しかも子育てをするということはどういうことかといったら、違う環境で育ったもの同士がそれに折り合いをつけながら子どもという一本にまとめる作業を、家庭の中でしなくちゃいけないんだよ。僕は君も知っているとおり、仕事を持ったお母さんに育てられ、忙しかったから家事育児に割く時間がものすごく短かったせいで、お母さんの雑な家事育児を見て育った。だから僕はものすごくやることは早いけれども、雑だ。君は丁寧に家事育児をやる専業主婦のお母さんに育てられたから、丁寧にやらないと気がすまない。しかし、それ

は環境の差がそうさせているんだよね。でも、洗濯は僕の責任でやらせてほしい。そのときは僕のやり方でやらせてほしい。僕はそういうふうに育ってきたにもかかわらず、君のやり方でやるものすごくストレスが溜まるんだ。子育てで一番まずいのはストレスを溜め込むことじゃないかな。だから、僕のやり方でやらせてほしい。今まで僕はずっと洗濯をやってきたけれども、僕が洗った布オムツで娘たちがあせもになったことは一度もないでしょ。ま、ちょっと汚いかもしれないけど、シミもないし、なんともないよ。まったくないよ。ノープロBLEMだよ。だから僕にやらせてごらん。君は見て見ぬ振りをすればいい」と2時間くらいそうやってしゃべりました。そしたら妻は、「わかった、もう二度とあなたが洗濯しているところは見ません」と言って、洗濯の係はまた僕に戻ってきて、それから妻は一度も僕が洗濯をしているところを見ていません。これが僕は夫婦生活の基本じゃないかと思う。必ず、育ってきた環境が違う。しかし、子どもがいることによってこれを1本化しなくちゃいけないですね。

例えば子どもをどの学校に入れるか。二つの学校に一人の子どもが同時にいけるわけじゃない。それぞれの違う価値観を一本に絞らなくちゃいけない。一本に絞るときにどのような方法を取るのか。お父さんがね、「お前は黙って俺の言うことを聞け」というのもまずいだろうし、お母さんの方が、「あなた余計な口出ししないで」っていうのもまずいでしょう。きちと二人でコミュニケーションをとって、言語を使って話し合うこと、これによって1本化していくしかないですね。子育てにおけるこういったコミュニケーションのとり方は、僕をものすごく成長させてくれたように思うんです。今振り返ってみるとですね、子育てを通して自分自身がすごく成長させてもらったあって気がします。



まず、最初は子育てに関わるということが自分の夢を遠ざけることだと思っていたら、なんとと驚くべきことに自分の夢を実現させてくれる方に導いてくれた。そしてさらに、それ以外にもものの見方、いろんなことを、歴史を見る角度であるとか、新しい視点とか、そういったものを非常に気づかせてくれたんですね。

で、僕の最新刊、これ『鋼鉄の叫び』という小説なんですけれども、この中で僕は、日本の教育問題をテーマに、実はこれ書いているんですね。保育園の送り迎えが終わって小学校、それから中学校、高校、大学と娘たちが進学する。その、いろんな場面で僕は勉強を娘に教えてきたんですね。僕自身、塾の先生をやったり家庭教師をやってたっていう経験があるもんですから、やっぱり子どもたちにもある程度大きくなってからは、僕が勉強を全部教えていました。それを通してみたときに、一体日本はどのような教育をやっていたのかわからないということに、非常に興味を持ってきたんですね。

この『鋼鉄の叫び』というのは、太平洋戦争の物語です。太平洋戦争のときの特攻隊の物語。主人公は特攻隊の隊長の海軍中尉です。峰岸中尉、これが主人公になります。どうしてここで、教育というものが絡んでくるのかというと、例えば戦前だったりすると、先程一番冒頭で紹介したように、母親の鶴子は亀太郎と結婚す

るように上の世代の取り決めによって決まっていた。自分で選択したんじゃないんです。上の世代からお前はこうなさいと決められている。ところが、そのフィアンセが戦死してしまって、その後に自由恋愛の結果、恭平と結ばれたんですけど、戦前はいろんな事柄が自分で決めることができなかったのがすごく多かったんです。婚姻も結構そうです。まあよく言われるように結婚式の当日になって初めて相手の顔がわかったっていうような感じだったんですね。

戦前は自分のことを自分で決める、選択するっていうことがすごく少ない、これはアジア全体に言えることです。アジアの国々はこういった集団主義、個人主義に対する集団主義的傾向が強かった。ところが、非常に集団主義的傾向で、村の掟であるとか、軍隊というものにまったくこの選択権が奪われているような状況の中に日本はあったんですけども、太平洋戦争によって、個人主義の国、欧米諸国の代表であるアメリカと戦い負けた結果、アメリカ流の考え方がスーッと入ってきちゃうわけですね。そのとき、アメリカ流の考え方がっていうのは、自分のことは自分で決めろっていう感じです。その代わり自分で選択したことには、ちゃんと責任を持てよという感じです。で、『鋼鉄の叫び』の中で、僕は特攻隊をメインとして取り上げましたが、この特攻隊の中には非常に日本的な選択の仕方の特色が如実に現れているなと思ったんですね。

皆さんご存知のように、特攻隊というのは、これは志願制度です。例えば、「特攻隊を志願する」「熱烈に志願する」「熱望する、希望する」「希望しない」と紙に書いて出してくれて決めた場合もあれば、兵隊を整列させておいて、「さあ特攻隊を志願したいものは一歩前へ」というふうに一歩前に出させて決めていた場合、いろいろあるんですけど、いずれにしても自分で特攻隊を志願するかどうか君たち自分で決めろと言われていた。ところが、これから集団の呪縛にあってしまうわけですね。僕だって思いますよ。今は非常に自我というのを強烈に持っているつもりですけども、あの時代、30人とか40人の列があって、「特攻隊志願するもの一歩前へ」っていうと、みんながずっと一歩踏み出すのを見て、一人だけ微動だにせずにいることができるかどうか。これはとてつもない勇気が伴わなければいけない。なかなかできなかったと思う。だから全員が前に出る。これ、上官から言わせれば、お前たち自分の意思で決めていることだろう、自分で選択したことだろうっていうわけなんだけれども、そうでもないわけですよね。集団のこの呪縛に負けて、やりたくないけれどもと思いを抱えながら、一歩前に出ざるを得ない状況になってきちゃった。命、生死に関わることを自分で決めろといわれるわけ。ところが、中にはいました。「希望しません」と返事をした人がいるんです。そうすると後で呼び出されて、上官から暴力的な制裁を受けるんです。お前は根性になってないって。結局これは、どっちにしろやらざるを得ないわけですね。特攻隊志願せざるを得ない。だったら最初から命令にすればいいんじゃないか。まだその方が心の負担が減ると思うんだけど、命令という方法は取ってないんです。特攻隊は、お前に命令するというやり方ではない、あくまでも志願制。こここのところに特攻作戦を命令として発動できなかったことから、この特攻作戦を考えた人、これを実行に移した地位の高い階級の人たちも、特攻という戦い方はダメだと、愚かな作戦であるとわかっていたんですね。わかっていたから、愚かな作戦に対しての作戦命令を出す、いずれは自分の責任が問われてくる。だから、これを志願制にして、じゃあみんながやりたいといったからやったんだというふうにすれば、後々言い逃れすることができる。これがですね、選択に関する非常に日本的なあり方なんじゃないかな。それが特攻隊というものに、非常に典型的な形で入っている。

ですから、僕はね、これを娘たちに言っていることなんだけれども、もはや自分のことはやっぱり自分で決めなくちゃいけない時代にきているんだよって言ってる。その思いを込めて、戦前の特攻隊をやっても、一人だけ勇気ある隊長が、部下を